

令和3年度 東京都内湾水生生物調査 6月成魚調査速報

●実施状況

令和3年6月3日に成魚調査を実施した。調査当日は小潮で、干潮が17時35分、満潮が10時40分であった(気象庁のデータ)。調査当日の透明度は1.2~1.6mであった。また、St.25、St.22、St.10で赤潮が発生しており、St.35でもプランクトンの増殖により透明度が低かった。貧酸素状態の発生はなかったがSt.22で貧酸素の傾向がみられた。(千葉県水産総合研究センターの貧酸素水塊速報では、St.22周辺を含む、浦安沖から千葉沖において貧酸素水塊の発生が確認されている)。

	St.35		St.25		St.22		St.10	
作業時刻	10:28-10:43		11:25-11:40		12:24-12:38		13:16-13:30	
水深(m)	24.1		14.1		11.7		7.2	
天候	晴		晴		晴		晴	
気温(℃)	24.3		25.9		25.7		25.5	
風向/ 風速(m/sec)	NE/3.0		W/3.1		W/4.8		E/5.0	
波浪(m)	0.1		0.1		0.2		0.2	
透明度(m)	1.6		1.4		1.2		1.4	
観測層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
水温(℃)	22.3	17.6	21.1	17.5	21.2	18.0	23.0	20.1
塩分(ー)	29.7	33.9	27.8	33.9	29.9	33.3	26.7	31.0
DO(mg/L)	15.8	4.7	12.6	3.7	15.7	2.1	19.6	6.9
DO飽和度(%)	217.1	60.0	166.6	47.3	211.2	27.2	267.3	89.3
pH(ー)	8.7	8.1	8.6	8.0	8.6	8.2	8.8	8.3
水の臭気	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし
備考			赤潮が発生していた		赤潮が発生していた		赤潮が発生していた	

観測層: 上層(0m)・下層(海底面上1m)

●主な出現種等 (速報なので、種名等は未確定です。)

主な出現種等	St.35	St.25	St.22	St.10
魚類	ハタタテヌメリ(m) マコガレイ(c) テンジクダイ(+)	ハタタテヌメリ(c) テンジクダイ(+) コモチジャコ(+)	ハタタテヌメリ(r) テンジクダイ(r)	モヨウハゼ(r)
魚類以外 (目立った種)	ケブカエンコウガニ(m) シャコ(m) スナヒトデ(c)	シズクガイ(c) エビジャコ(+) サルエビ(+)	チヨノハナガイ(m) オウギゴカイ(c) ケブカエンコウガニ(c)	ウミサボテン(m) キセワタガイ(c) クシノハクモヒトデ(c)
備考	上記の他、モヨウハゼ、ゲンコ、メイタガレイ、ジンドウイカ科、フタホシシガニ等が確認された。	上記の他、マコガレイ、カナガシラ、スベスベエビ、シャコ、キセワタガイ等が確認された。	上記の他、シャコ、サメハダヘイケガニ、フタホシシガニ、イッカクモガニ等が確認された。	上記の他、イッカクモガニ、ウミフクロウ、イシガニ、ミノウミウシの仲間等が確認された。

注)表中の()内の記号は大まかな個体数を表す。

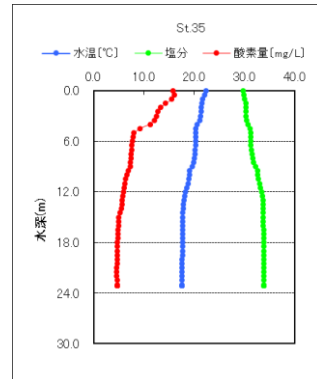
G:1000 個体以上、m:100～1000 個体未満、c:20～100 個体未満、+:5-20 個体未満、r:5 個体未満

調査地点：St.35

調査地点位置



水質状況



プランクトンの増殖により、表層付近で溶存酸素は多かった。

地点状況



南側には東京湾アクアライン「風の塔」が見える。

採取試料



主な出現種

※写真のスケール 1 目盛:1mm

スナヒトデ



内湾の砂泥底に生息する大型のヒトデの仲間。移動速度は速く、砂泥上をすべるように移動する。砂中の貝類等を捕食する。通常は 5 本腕であるが、まれに腕の数が多く出現することがあり、本地点でも 6 本の腕を持つ個体が採集された。

アカハゼ



比較的深所に生息する。東京湾全域から出現記録があるが、現在は主に湾中央に分布する。湾奥では貧酸素水塊の影響により減少したと考えられている。似るコモチジャコには尾鰭に縞模様があるが、アカハゼには無い。

マコガレイ



東京湾では普通に見られるカレイの一種。浅い砂泥底に生息し、全長 45cm 程に成長する。仔魚の時は左右に目がついているが、次第に左目が移動し、最後には体の右側に両目が揃う。

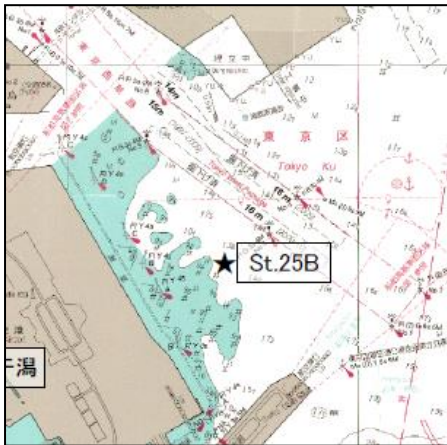
メイタガレイ



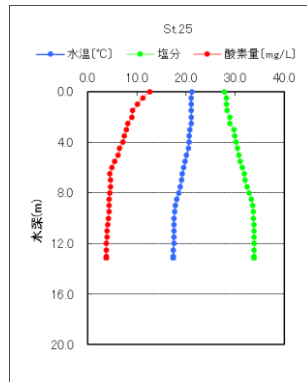
体長 20cm 程になる。水深 20～120m の砂泥底に生息し、多毛類等を食べる。名前の由来は、眼の間に棘があり、触ると痛い（目痛鰈）とされる（諸説あり）。

調査地点：St.25

調査地点位置



水質状況



プランクトンの増殖により、表層付近で溶存酸素は多かった。

地点状況



西側には東京国際空港が見える。

採取試料



主な出現種

※写真のスケール 1 目盛: 1mm

カナガシラ



全長 30 cm 程に成長する。胸びれの軟条 3 対が独立して「脚」のように発達しており、海底を歩くことができる。東京湾の湾奥ではあまり見られず、本調査では昨年 6 月に本地点で初めて採集され、2 年続けて同時期、同地点での出現となった。

テンジクダイ



東京湾全域に出現し、特に湾奥に多い。砂泥底に生息して甲殻類等を食べる。繁殖期は 7～10 月で、親魚が卵を口の中にくわえて孵化するまで保護する習性を持つ。

コモチジャコ



アカハゼに似るハゼの仲間。東京湾全域から出現記録がある。比較的深所の泥底から砂泥底に生息する。産卵期は春。

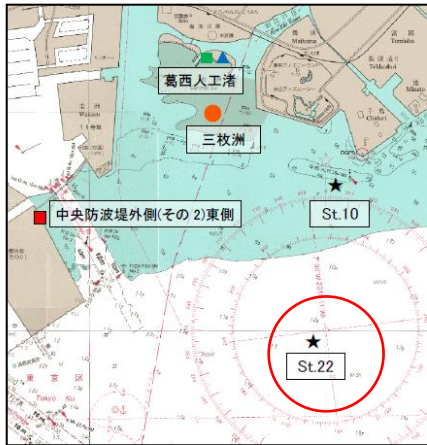
ゲンコ



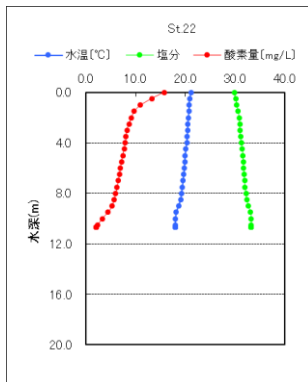
いわゆる舌平目と総称されるウシノシタ科魚類の一種。東京湾の湾奥ではあまりみられず、本調査においては一昨年度の調査で初めて出現した。砂泥底に生息し、底生生物を食べる。

調査地点：St.22

調査地点位置



水質状況



プランクトンの増殖により、表層付近の溶存酸素は多かった一方、底層の溶存酸素は低かった (DO:2.1mg/L)

地点状況



北西側には東京ゲートブリッジが見える。

採取試料



主な出現種

※写真のスケール 1 目盛:1mm



ほぼ球形で、殻は薄く脆い。長い足が鳥の嘴に見えることが名前の由来とされる。危険が迫るとこの足を激しく振り回して逃亡する。内湾の砂泥底に生息し、東京湾奥部では夏季の貧酸素水塊の発生により、ほとんどが死亡する。

スネナガイソガニ



甲幅が 1.5 cm 程になる。甲羅が丸みのある正方形で、短い毛が生えている。砂泥底に生息しており、アマモ場でよく見られる。

サメハダヘイケガニ



砂底に生息する。甲幅 3cm 程で、小さい 2 対の脚がカギ状になっており、二枚貝の貝殻を背負う。ヘイケガニの名は、甲羅の模様が怒りの表情に見え、壇ノ浦の海戦で滅亡した平家の亡霊が蟹と化したとの伝説に由来する。

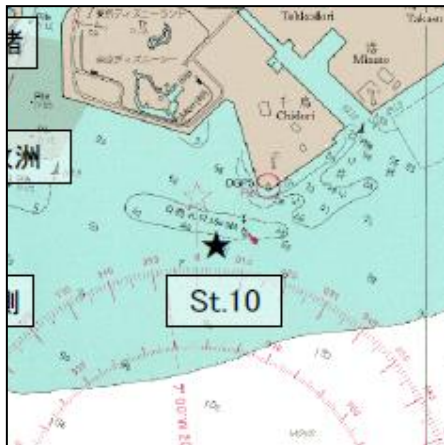
ジュウイチトゲゴブシ



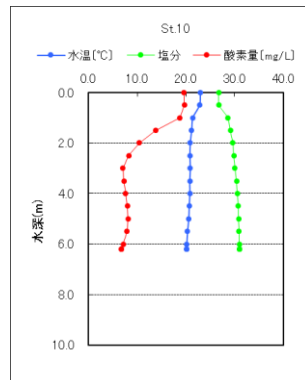
丸く厚みのある甲羅の周囲に 11 本の棘を持つことが名前の由来となっている。砂底や砂泥域に生息し、東京湾全域で出現記録がある。

調査地点：St.10

調査地点位置



水質状況



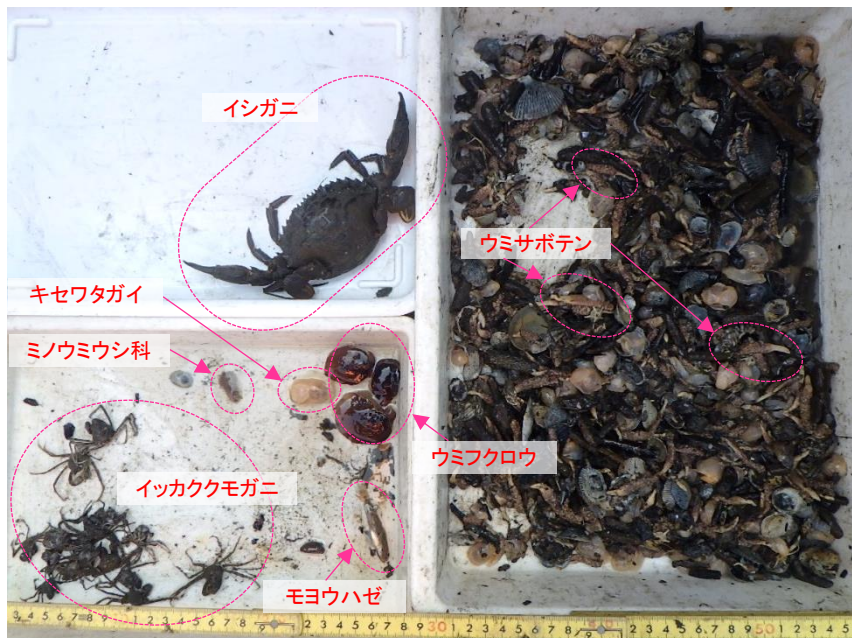
プランクトンの増殖により、表層付近で溶存酸素は多かった。

地点状況



北側には、東京ディズニーリゾートが見える。

採取試料



主な出現種

※写真のスケール 1目盛:1mm

ウミフクロウ



ウミウシの仲間。本州全域と九州に分布する。比較的深い海底から潮間帯の岩礁に生息し、アマモ帯などの砂上にもしばしば見られる。肉食性で、他のウミウシや甲殻類、イソギンチャク等何でも食べる。



全長8cm程になる。体側に小さな青色の斑点が散在する。東京湾では湾奥から湾央にかけての水深10~40mほどの砂泥底に生息する。



1本1本が多数のポリプが集合した群体性の刺胞動物。夜行性で、昼間は身を縮めて海底に潜っているが、夜になると身を伸ばして水中で各ポリプが触手を広げ、その姿がサボテンのように見えることからこの名がついた。また生物発光し、刺激を受けると緑色の光を放つ。



種は不明であるが、ミノウミウシの仲間が採集された。ミノウミウシの仲間はイソギンチャクやヒドロ虫など刺胞動物を捕食するものも多く、本地点では刺胞動物であるウミサボテンが多く出現したことも関連している可能性がある。